

グローバル都市マニラと都市底辺層(2)

スクオッターにおける女性の就労経験からみる新国際分業・再生産労働の国際分業のローカルな解釈

フェリス女学院大学 小ヶ谷千穂

本報告は、マニラにおける都市底辺層の階層化の進展をグローバリゼーションの文脈から考察する手がかりとして、女性労働力、特にスクオッターにおける女性労働の編成に注目する。具体的には、マニラ首都圏マリキナ市(Marikina City) マランダイ地区におけるスクオッターおよびその近隣の女性たちの就労歴のケース・スタディから、マニラのグローバル都市化がどのような女性労働力の再編成を生み出してきたのかを検討する。

グローバリゼーションと女性労働の関係については、1970年代からの新国際分業体制下における途上国女性の輸出加工区での工場労働、1980年代からは再生産労働の国際分業下での「移動の女性化 feminization of migration」を伴った先進・新興国での再生産労働部門への移住女性労働者の流入が議論されてきた。特に世界的な海外労働者の送り出し国であるフィリピンは、「再生産労働の国際分業」の理論化において、常に重要な事例として扱われてきた。しかしながら、女性労働者がどのようなローカルな文脈の中から海外就労へと析出されていくのか、という点については、「移動の文化 culture of migration」や、「家族戦略」といった視点からの議論が多く、海外就労をどのような「働き方」として個々の労働者が認識しているのか、どのようなローカルな「働き方」の連なりの中で海外就労が「選択」されているのか、という点については精査されてこなかったと言える。

また、青木(2013)が指摘するように、マニラのスクオッターにおいても従来が議論されてきたような農村から都市への移住者がその人口の中核を占めるのではなく、第2・第3世代の都市生まれ人口が労働力層の中心を構成するようになってきている。本研究が対象とするマリキナ市マランダイ地区も同様である。中でも女性の就労歴に着目してみると、1950~60年代生まれ、1970~80年代生まれ、1990年代生まれの世代間において明らかな就労形態の違いが観察された。そこでは、外国資本の下での保障のない短期契約雇用、海外就労およびその「未遂」にあたるような経験も含まれている。また、世帯内での世代別の女性の就労歴の推移は、その世帯の居住形態や学歴の変化などとも密接に関連している。また、こうしたマランダイ地区内部における労働者層の再生産に加えて、家事労働に従事する若年女性の国内移動も同時に発生している。グローバル資本に多様な形で適合的な女性労働力の創出/送出手は、伝統的な女性の移動および就労によって、同一の都市空間の中で支えられているのだ。

以上の点を踏まえて本報告では、1)女性の海外就労の意味を送り出し社会における「ローカルな文脈」からより具体的に解釈すること、そしてそれが2)マニラのグローバル都市化とどのように関連しているのかを明らかにすること、という2つの研究目標を設定する。